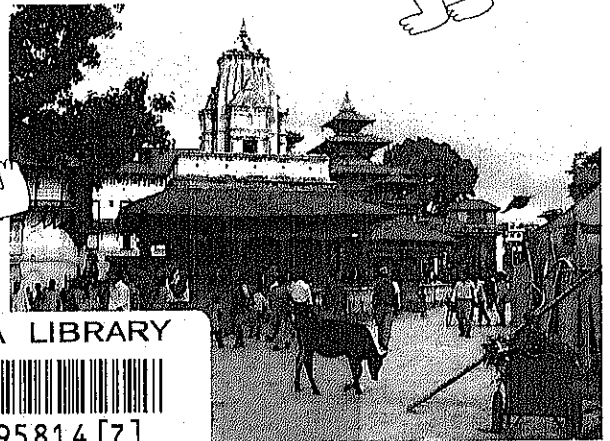
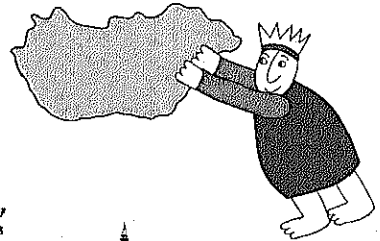
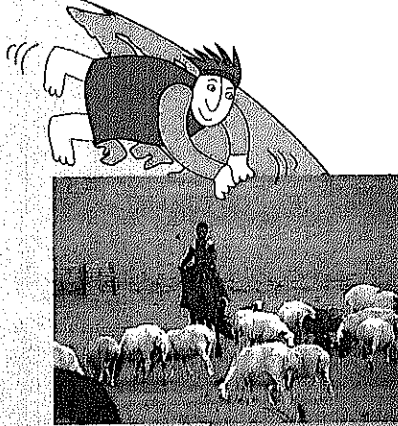


総合的な学習の時間・選択教科に役立つ
国際理解教育の手引き

先生が見てきた国際協力の舞台

■平成12年度中学校教師海外研修に参加して■



JICA LIBRARY



1195814 [7]



JICA

000
36
DPD

LIBRARY

JICA

国際協力事業団

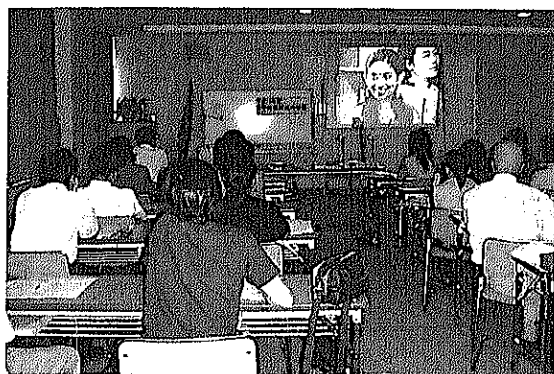
国内国

J R

異文化と出会う前に

国内事前研修

出発前、参加者は開発途上国への理解を深めるワークショップを体験。現地での「ものの見方」がぐんと違ってくる大切な時間だ。青年海外協力隊員の話に、訪問国への想いがふくらんでいく。



1日目

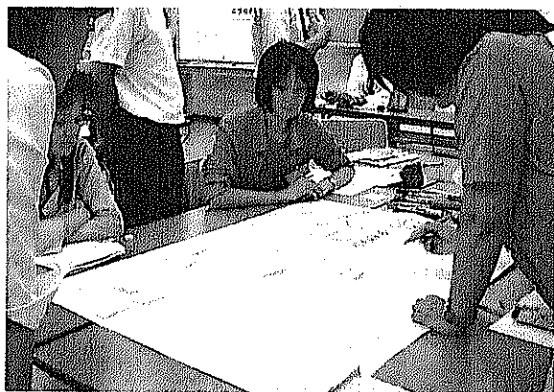
開会の挨拶が終わり、事前研修のスタート。まず、初めて会う参加者同士の自己紹介は、緊張をほぐすために、簡単なゲームをしながら行われた。

■開発教育ワークショップ(1)

生徒たちの目を海外に向けるための方法として、世界地図を使う方法とゲームを紹介。

■テーマ別ディスカッション

テーマ別に3つのグループに分かれて意見交換をし、話し合った内容を模造紙にまとめてグループごとに発表。



2日目

■開発教育ワークショップ(2)

コミュニケーションの取り方のヒントになるような話を、アクティビティを交えながら進めていく講義。この後、研修国グループ別に分かれて協力隊帰国隊員から各国の概要説明。

■開発教育ワークショップ(3)

開発教育の考え方を整理すると共に、実践例を紹介。

■コース別ディスカッション

研修国のグループに分かれて、現地での行動の仕方について、また帰国後に制作する教材集について、それぞれ意見交換し、前日同様、ディスカッションの結果を発表。

結団式をして事前研修終了。翌日は国別に出発。



モンゴルへ

国土の8割を草原が占める国。厳しい気候のもと遊牧生活を続ける人々に出会った。

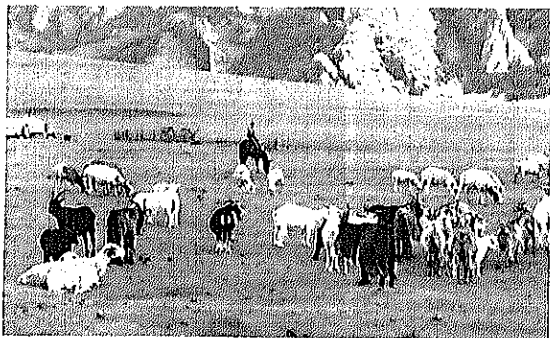


1日目 関西空港から約4時間半、現地時間夜9時、首都ウランバートルに到着。顔は似ているが違う言葉をしゃべる人々がいる。

2日目 市内見学。ボグドハーン宮殿やガンダン寺、自然博物館などをまわる。

3日目 ウランバートル郊外のテレルジにて自由行動。

4日目 日本大使館、JICA事務所を訪問。午後はモリオンオール气象台を見学後、日本の無償援助により日本製バス100台と修理工場が建設された第一バス公社へ。ここでは日本の専門家と青年海外協力隊員が活動している。ここの整備士は日本車の知識に乏しく、維持管理の能力に限界があったが、彼らの技術指導により、日本のバスが現在でもウランバートルの市民の足として活躍することができている。今回の研修で初めて日本の国際協力の現場を見る。夜はJICA事務所が主催する懇親会で、モンゴルの伝統料理と民族音楽を堪能する。



5日目 車で3時間半かけて、ダルハンという町へ。まずは市の水道管理局へ。協力隊員が水質検査官として活動中。環境保全の観点から、下水処理を科学的薬品に頼らない方法への転換を進めている。その後、病院の機能をもつ幼稚園で保母として活躍している協力隊員を訪問。栄養不良、発育不全、知的障害をもつ児童に、情操教育や会話、運動能力を高める教育を行っている。また、教師の育成にもかかわっている。モンゴル語と笑顔の彼らの活動ぶりに刺激を受ける。その余韻を残したまま、夜は専門家との懇親会でモンゴルでの協力活動の話などで盛り上がる。

6日目 早くも研修の半分が過ぎる。午前中、製鉄所を視察。ここでも専門家が2名、管理・運営の安定化などの面で技術協力している。午後、再びウランバートルへ。



7日目 プロジェクト方式で日本が技術協力している、家畜に関する研究が行われているセンターを視察。午後、日本の看護技術やシステムを導入するため活動中の看護婦隊員を訪問。モンゴル全域から患者を受け入れている総合病院での、看護システムの安定を目指す。

8日目 中学校を視察。夏休み中のため、残念ながら生徒との交流ができなかったが、先生方との昼食会では、同じ教育現場で働く者同士、話も弾んだ。

9日目 どうとう最終日。それぞれ、思い残すことのないよう、最後のモンゴルを目に焼き付ける。



1195814 [7]

ネパールへ

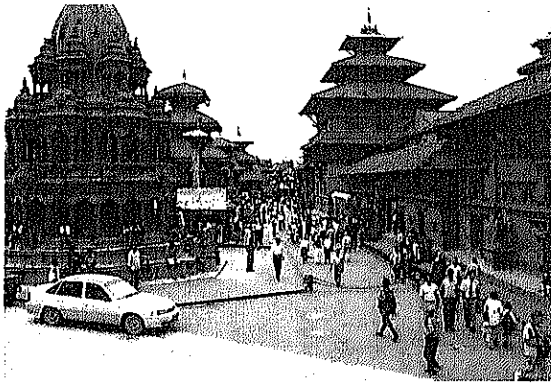
エベレスト山脈が連なる「神々の国」。訪れた小学校で毎日を精一杯生きる子どもたちの笑顔に感動。

1日目 まずはタイ、バンコクへ向けて関西空港を出発。

2日目 飛行機の窓から遠くにエベレストを見ながら、いよいよネパールに入国。

3日目 カトマンズ市内を見学。日本とは違う習慣や文化を見る。

4日目 JICA事務所と日本大使館を訪問後、国立教育センターを見学する。2015年までに初等教育の完全普及を目指しているネパールのプロジェクトに、日本が協力している。JICA専門家の活躍ぶりを見る。夜はJICA事務所主催の懇親会へ。

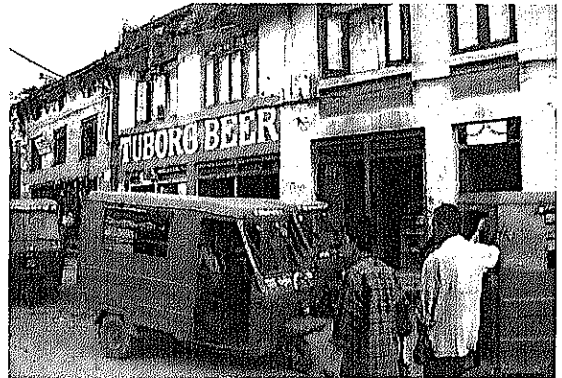


5日目 午前中は公立の小・中学校を見学する。午後は協力隊員が派遣されているろう学校を訪問。教師用指導書の作成、特に数学・理科を中心に教授方法のアイデアなどが求められている。もちろん手話も必要であるため、ネパール語とともに現地の手話も覚えなければならない。

6日目 チトワンへ移動。インドとの国境に近く、野生の動物が多く観測される地域である。無償資金援助で建設された小学校の施設を見学。現地では貴重な校舎である。今でも校舎がなく青空教室で教育を受けている生徒はたくさんいる。学校すら行けない子どもがいる現実もある。その後カトマンズへ戻る。

7日目 5歳未満児の死亡率が極端に高いこの国では、医療に恵まれない地域での保健の指導が行われ

ている。日本はヘルスケアセンターを設立し、専門家や医師、看護婦を派遣してきた。そのプロジェクトの様子や現場の視察をする。午後、多くの専門家や協力隊員が派遣されているトリバン大学教育病院を見学。



8日目 職業訓練校にて、2人の協力隊員の活動を見学する。電子機器・工作機器の指導を行っている。その後、教育分野で活躍中の専門家・協力隊員と意見交換をする。現地での技術移転の方法や難しさなど、意見を聞く機会を持つ。

9日目 日本人補習授業校見学。日本以外の地で、日本の教育をする教師や日本を離れて暮らす生徒たちと交流する。

10日目 たくさんの思い出を胸に、カトマンズを出発。バンコク経由で翌日、日本到着。



中国

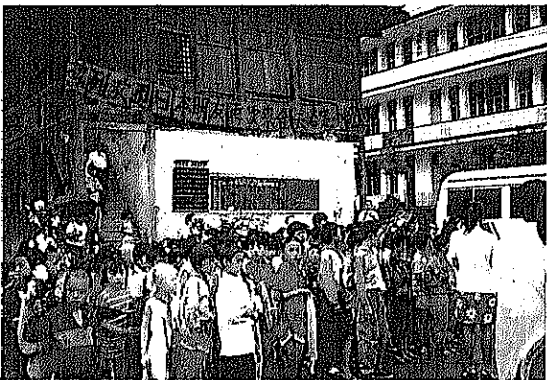
近代化が進む都市と昔ながらの農村、急速に変化する町の顔が見える。万里の長城にこの国のスケールの大きさを実感。

1日目 日本のお隣、中国へは、わずか3時間の空の旅。さっそくJICA事務所を訪問。オリエンテーションの後、事務所主催の懇親会で初日が終わる。



2日目 抗日戦争記念館を視察。かつて対戦国であったことを改めて感じる。その後、かの有名な故宮や万里の長城を見学。

3日目 終日市内見学。



4日目 日本の技術協力先である、消防技術訓練センターを視察。北京の都市化に対応できるような、消防技術や機材の整備についての訓練が日本の協力で進められている。次に、日本の無償援助で建てられた日中友好病院へ。1日平均2,500人の外来患者を受け入れているこの病院の運営スタッフ育成のため、過去12年間にわたり技術協力が行われた現場を視察する。

5日目 国内線で張家界へ。日本語教師隊員の活動する武陵大学を訪問する。世界自然遺産の武陵源を有するこの地域では、日本からの観光客も多い。そこで、日本語ガイドの育成のため、充実した日本語の授業が望まれている。

6日目 希望工程小学校を訪問。熱烈な歓迎を受ける。中国の教育現場の様子をのぞき、日本との違いや共通点を発見したり、先生の授業のとりくみ方などを自分の目で確かめる。教師として、興味のあることがたくさんあった。



7日目 貧困地区などをまわる。

8日目 北京へ戻る。

9日目 終日自由行動で、帰国後授業に役立てることのできるような題材を、写真に取めたり、中国のことがうまく伝わるような現地のものを調達したりする。

10日目 いろいろな体験ができた中国を後に、帰国。

はじめに

国際協力事業団（JICA）は、政府開発援助（ODA）のうち、「人づくり、国づくり、心のふれあい」を合い言葉に、研修員の受け入れ、専門家・青年海外協力隊の派遣などの「人を通じた国際協力」を中心に実施する特殊法人です。

日本は今では世界有数のODA供与国となりましたが、第二次世界大戦後しばらくの間は、諸外国の支援により復興を果たし、その後高度経済成長を遂げるに至りました。今の日本の繁栄も開発途上国をはじめとする他国との相互依存の上に成り立っています。現在、世界最大の援助国となった日本には、開発途上国のニーズに応え、世界の平和と発展に積極的に貢献していくことが求められており、人を通じた国づくりを支援しているJICAの責務はますます高まっています。

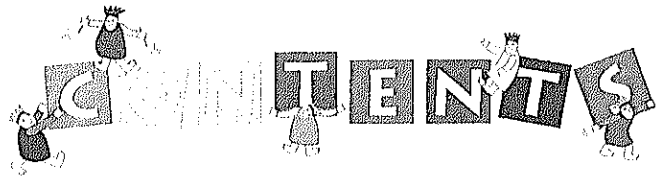
JICAは現在、国民の皆様にも私どもの活動に「理解、支持、参加」をいただくため、市民参加型の国際協力事業の推進とその一環としての開発教育支援に取り組んでいます。

全国の中学校において開発教育や国際理解教育に取り組んでいらっしゃる先生方や、開発途上国の抱える問題に関心を抱いている先生方を対象に、開発途上国における経済、社会、教育の実情や、JICAの実施する国際協力の現場視察を目的とした研修旅行を実施しています。今回の研修では、モンゴル9名、ネパール15名、中国6名、合計30名の先生方に7月下旬から8月上旬にかけて12～13日間の研修に参加していただき、開発途上国および国際協力に対する見聞を広めていただきました。

この度、研修に参加された先生方のご協力により、研修で得た経験にもとづいて行った授業実践例を冊子としてとりまとめました。この冊子が開発教育や国際理解教育に関心のある方の参考となり、今後導入される総合的な学習の時間の一助になれば幸いです。

平成13年3月

国際協力事業団
国内事業部長 今津 武



異文化と出会う前に 国内事前研修

モンゴルへ

ネパールへ

中国へ

はじめに

第1章 研修を生かした授業実践例

社会科 ■ モンゴルの生活について考えよう	竹内 佳子	8
社会科 ■ 開発途上国にどのようにかかわるべきか	曾田 和彦	14
国語科 ■ 元気の出る国・中国との出会い	廣目 美幸	20
選択教科 ■ 手紙で伝えよう！ 私たちのことを	内山 朱実	26
選択教科 ■ 写真からネパールの実情を知ろう	山本 朝世	32
美術・学級活動・道徳 ■ 水墨画の表現を通して自分たちの文化や生活を外国に紹介しよう	村上 一恵	38
クラブ活動・総合的な学習 ■ 国際理解教育の視点でとりくんだ「英語クラブ」	佐藤みどり	40
生徒会・行事・教科 ■ 特別活動の横断的カリキュラムによる国際理解教育のとりくみ	竹崎 葉子	42
道徳・特別活動 ■ 二一八才中国	植木 章江	44

第2章 参考資料

国内事前研修日程	48
海外研修日程/参加者感想 モンゴルコース	49
海外研修日程/参加者感想 ネパールコース	51
海外研修日程/参加者感想 中国コース	53
開発教育関係団体及び教材紹介	55
中学校教師海外研修のご案内	60
JICAはこんなこともしています	63
JICA国内機関問合せ先	64
地域国際交流協会等一覧	65

第1章

研修を生かした授業実践例

開発途上国の現状を自分の目で確かめた10日間。
帰国後、参加者は授業やクラブ活動を通して
その感動を生徒に伝えていきました。
ここでは、研修を生かした意欲的な授業例を紹介します。



モンゴルの生活について考えよう

— 都市の暮らし、遊牧の暮らし —

TAKEUCHI YOSHIKO

竹内 佳子

兵庫県尼崎市立大庄北中学校

はじめに

この夏、モンゴルへの海外研修に参加し、国際理解教育に関して、多くのことを学ぶことができた。開発途上国が抱えている問題は実に多様だ。そのことを実際にモンゴルの地に立って全身で感じとれたことは、私にとって非常に大きな体験になった。

私自身の価値観がゆらいだ

研修中、私が最も感動したのは遊牧民の子どもの笑顔だった。多くの素晴らしい方たちとの出会い。ロシア、中国という大国にはさまれた内陸国が抱えている問題。日本の援助の実態とこれからの果たすべき役割。教々の思いを胸に、帰ってきたのだが、いつまでも色あせずに残っているのは子どもたちの笑顔の輝きである。このまぶしい笑顔は、私にさまざまな思いを抱かせてくれた。「人間にとって、幸せってなんだろう?」「豊かさってなんだろう?」私自身の価値観が大きくゆらいだ。そしてこの心のゆれを、子どもたちに体験させたいと思った。

迷った末のタイトル選びとなったのだが、対象が1年生ということで、どこまで深められるかが問題だった。全てを詰め込むには時間的に無理があるので、結局今回は大きなテーマを“異文化理解”とした。そして、最も私の心がゆれた遊牧民が持つ“心の豊かさ”に、最後の授業では少しでも気づいてほしいと願った。

遊牧生活の紹介から

これからの21世紀を国際社会人として生きていく生徒たちに、まず、世界にはいろいろな国があり、文化があり、生活があるということを伝えたい。モンゴルという国には、われわれとは全く異なった「遊牧生活」を営む人々がいる。家畜とともに過ごし、「ゲル」という移動式住居でモンゴルの人たちはどのような生活をしているのか。生徒たちにまず興味や関心を抱かせて、実態を知るとともに、異文化を受け入れられる心を育てたい。

また、現在のモンゴルの都市部では近代化が進み定住生活を営む人がある一方、地方部は昔のままの遊牧生活である。それぞれの生活が抱えているよい点、問題点を見つけ、私自身がモンゴルで感じた“精神的な豊かさ”と近代化の問題点まで、できれば踏み込んで考えさせたい。



遊牧民の子どもたちと（後列右から4番目が竹内教諭）

授業の構成 実施科目 社会科 対象 中学1年(2クラス36人) 4時間

時限	テーマとねらい	方法・内容	使用教材
1	<p>豊かな生活に必要なものを考える</p> <p>物質的なものや精神的なものなど、人によってさまざまな価値観があることをゲームを通して知る。</p>	<p>1. 「欲しいもの・必要なもの」ゲーム。</p> <p>2. 各班で話し合い、まとめて発表する。</p> <p>3. 質問や意見を出し合って、互いの考えや価値観を知る。</p>	<p>ゲームのカード</p> <p>発表用の模造紙</p>
2	<p>モンゴルを数字で知る</p> <p>モンゴルについて資料で数字を調べていき日本と比較しながら、国の様子をイメージする。</p>	<p>1. 普通の授業で使っている資料を使って、プリントにまとめる。</p> <p>2. 日本についても同様に調べ、モンゴルと比較してみる。</p>	<p>地図帳、資料集(気候、面積、人口、人口密度、GNPなど)、学習プリント</p>
3	<p>モンゴルの生活を考える</p> <p>前時で調べた内容を確認しながら話し合い、モンゴルではどんな生活をしているのか考える。</p>	<p>1. 前時のプリントを用いて、各班で話し合い、模造紙にまとめて発表する。</p>	<p>発表用の模造紙</p>
4	<p>モンゴルの生活を知る</p> <p>都市部と地方では生活形態が異なることを知り、近代化と精神的な豊かさとの関係についても考えてみる。</p>	<p>1. モンゴルの音楽やおもちゃにふれて、異文化を感じとる。</p> <p>2. 都市部と地方の生活の写真を見て実際のモンゴルの生活を考える。</p> <p>3. 自分たちの予想と一致した点・違っていた点を見つける。</p> <p>4. 2つの生活のそれぞれに「豊か」な面を探す。</p>	<p>モンゴルのおもちゃ、ゲルの模型、馬頭琴のミニチュア、ホームーのテープ、写真</p>

授業の展開

1時限目
豊かな生活に必要なものを考える

クラスを6人ずつの6班に分けて、「欲しいもの・必要なもの」ゲームを行う。

〈手順〉

1. 生徒は「豊か」という言葉の意味を辞書を引いて調べる。
2. カード20枚を配る。カードに書いてある文字は平和、平等、安心な水、学校、病院、自動車、テレビ、自転車、携帯電話、快適な家、きれいな

空気、流行の服、お菓子、自分の部屋、ファミコン、栄養のある食べ物、薬、お金、新聞と雑誌、電車とバス。

3. 白紙のカード4枚の内容は、班で話し合って決める。
4. サイコロをふって、目の数だけのカードを選び、模造紙に貼る。
5. 各班、順番に前に出て、発表と質疑応答。

生徒の反応

まず各班とも、白紙のカードに何を書くかの話し合いで盛り上がった。自分たちの生活をふりか

えて、「コンビニ」「ビデオ」という意見。「家族」「友だち」「ペット」など心のつながりを求める意見。「健康」「権力」などの目に見えないものなどいろいろな意見が出ていた。

次に、サイコロの目の数だけという制限の中で、何を残すかという話し合いも班内で激論となった。

各班の発表後の質問も積極的に出て、懸命なやりとりが続いた。たとえば「平等」をはずした班に対して、「差別されてもいいのか」という意見が出た。また何と言われても「お菓子」ははずせないという班もあった。

私が驚いたのは、半分の班が「学校」をはずしたことである。勉強は自分の家でもできるからというのが、大方の意見だった。その一方で「快適な家」をはずした班はその理由として、「ずっと学校にいればいい」という説明をした。全体として、私の思いもしなかった展開が繰り返され、聞いているだけで私自身も楽しい授業だった。

2時限目

モンゴルを数字で知る

1. 班で話し合っ、学習プリントに入る語句や数字を入れていく（ワークシート参照）。
2. 答え合わせと解説。
 - ・難しい語句（人口密度、GNPなど）は説明をする。
 - ・より明確なイメージを持たせるために、日本と比較させる。
3. 学習プリントと手持ちの資料集に掲載されているモンゴルの写真（ゲルの生活）1枚から、各自でモンゴルの人たちの生活を考える。
4. 3.について、できるだけ具体的に文章でまとめる。

生徒の反応

語句や数字を入れるという作業は、時間もかかり、途中で気がそれる生徒が出てくるのでは、と心配であったが“班で助け合って完成しよう”と

いう形にしたので、思ったよりも早くプリントができあがった。

生徒はプリントを見て、さまざまな数字に驚いていた。たとえば、人口密度（モンゴルは1平方キロメートルに2人、日本は333人）。国民1人あたりのGNP（モンゴルは380ドル、日本は32,350ドル）などだ。

これらの数字と一枚の写真から、モンゴルの人たちの生活をイメージさせてみると、こちらがびっくりするほどの観点で、考えを書いてきた。これは1学期の授業「乾燥帯の人々の暮らし」で学んだことが、残っていたためのようだ。やはり生徒にとって、モンゴルは印象に残る国らしい。

モンゴル・学習プリント（1）

班 番

モンゴルってどんな国？ 「日本と比べてみよう！」

	モンゴル	日本
気候	冷帯	冷帯
首都		
人口	万人	万人
面積	万km ²	万km ²
人口密度 (人/km ²)	人	人
主な言語	モンゴル語	日本語
通貨単位		
国民総生産 (GNP)	百万ドル	百万ドル
国民一人 あたりGNP	ドル	ドル
貿易額・輸出	百万ドル	百万ドル
貿易額・輸入	百万ドル	百万ドル

※ 一人、一日あたりの食料量 (g)

	モンゴル	日本
穀類		
いも類		
野菜類		
肉類		
牛乳・乳製品		
魚介類		

2時限目で使ったワークシート

〈生徒の考え〉

- ・モンゴルの子は、毎朝動物にえさをあげている。
- ・学校に行かなくてもいい。
- ・電気が通ってなさそう。
- ・動物たちと一緒に楽しく生活している。
- ・友だちがいない。

- ・チーズばかり食べている。
- ・家に帰っても、お母さんの手伝いばかりしている。
- ・学校に何キロも歩いていかなければならない。
- ・風呂に入れなくて、暖かい日に水浴びをする。
- ・家は殺風景で小さい。
- ・みんな仕事をしていて、やりたいことができない。
- ・ゲームなどが無いから、外で元気に遊んでいる。
- ・食べ物に不自由していて、紙や水道もない。
- ・CD、パソコン、携帯電話がない。
- ・冬は家がテントだから寒すぎる。
- ・簡単にいえば、昔の日本って感じ。
- ・毎日だいたい同じ服を着ている。
- ・家族みんなが仲良し。

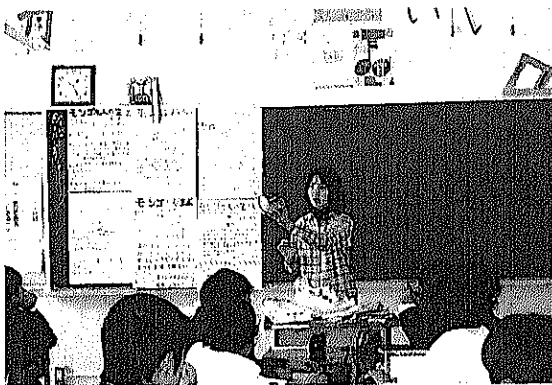
3時限目

モンゴルの生活を考える

1. 前時で自分の考えを書いたプリントを持ち寄って、班の考えをまとめる。
2. 模造紙に書いて、班ごとに前に出て発表する。班で話し合っ、疑問があればそれも発表する。

生徒の反応

各自の意見をまとめる作業は、どの班も時間がかかった。しかし、前に模造紙を貼りだして発表の場面になると、苦勞して話し合った分、各班独自の考えが出ていたように思う。



4時限目、生徒の疑問を書いた模造紙を貼り、ゲルの模型を見せる

4時限目

モンゴルの生活を知る

1. 黒板に前時で発表した模造紙を掲示しておく。
2. モンゴルで購入した、家畜の歯でできたおもちゃ、ゲルの模型、ミニチュアの馬頭琴、モンゴルの伝統音楽「ホーミー」のテープを使い、生徒にモンゴルの文化を感じてもらう。
3. モンゴルの写真（写真6枚でワンシート）を各班に3シートずつ配り、どれが都市でどれが地方の様子なのか、話し合って分けさせる（写真1～3）。
4. 黒板に正解の分け方を示し、それぞれの写真に簡単な説明を加える。
5. モンゴルでは、都市の定住生活と地方の遊牧生活があることに気づかせる。
6. 自分たちがイメージしたモンゴルの生活と、実際のモンゴルの生活の一致した点、違った点を、黒板の模造紙を見ながら各自確認する。
7. 写真のモンゴルの人たちの表情やくらしの様子から、定住生活と遊牧生活にはそれぞれの豊かさがあることに気づかせたい。

生徒の反応

導入部分で私が次々とモンゴルのお土産を出していったとき、生徒たちはかつてないほど、目を輝かせていた。歯のおもちゃにはワアワア言いながらさわって喜び、ホーミーのテープも必死に二重の音を聞き取ろうとしていた。

3シートの写真を都市と地方に分ける作業は、班であれこれと議論をしながらとりくんでいた。写真を見て新たにいろいろな疑問や聞きたいことが、生徒の中に出てきているようにも思った。

生徒たちは自分たちが考えていたモンゴルは、地方の生活の一部であり、お金がない、電化製品がない、ゲームがないという、マイナスにとらえがちなことも「実はそうではないのでは？」と気づき始めたようである。

写真1 首都ウランバートルの都市の生活。学校や商店も整っている

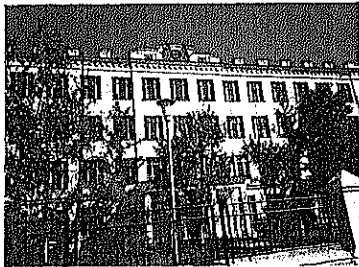
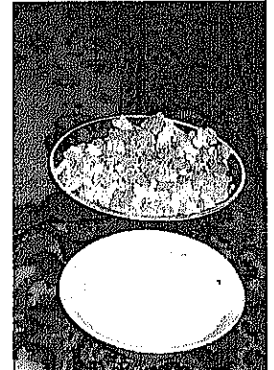
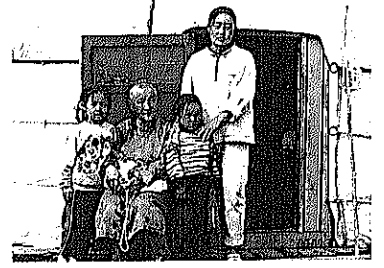


写真2 遊牧の生活。モンゴルの子どもの表情



写真3 遊牧の生活。ゲルの引っ越しはトラックを使う。馬の乳から作った酒やチーズもある



風景と時間

固定観念を崩す

4時間の授業を通して、生徒たちは確かにモンゴルに大きな興味を抱くようになった。自分たちと全く違う環境や生活形態というものは、おもしろいらしい。「へえー」という純粋な驚きや感嘆の声が、いろいろな場面で起こった。

その中で私が打ち崩したかったのは、「GNPが低く、低所得＝貧しくてかわいそう」という一般的な固定観念である。案の定、2時限目の授業の時点では、大方の生徒はモンゴルに対して、そのような思いを持っていた。ただ、何人かはモンゴルにあこがれのような気持ちを持っており、最初から肯定的に遊牧生活をイメージしている生徒もいた。

生徒たちの想像力は非常に豊かで、全く見当はずれのものもあったが、「蚊がいっぱいいそう」と、私が行って初めてわかったことなども書かれており驚いた。

「豊かさとは？」まで深めたい

4時限目の授業が大きなヤマ場だったのだが、反省点が多くある。私は写真からモンゴルの実態を伝えたかった。生徒たちは身を乗り出して写真に見入っていた。写真の説明をしている時も興味深げであり、やはり私が直接感じてきた思いは生徒にストレートに入ることを感じた。

モンゴルの子どもはちゃんと学校に通っていて、校舎はきれいなこと、高層マンションもたくさん建っていることを知り、自分たちの勝手な予想が大きくはずれていた場合は素直に驚いていた。

ただ、私がここで、都市部と地方の2つに分けて写真を提示したのは、「近代化が豊かさの全てか？」ということに気づいてほしかったからだ。そこに行きつくために取り入れた1時限目のゲームであった。しかし、ほとんどの生徒が“物質的な豊かさ”にのみ目を向けていて、“精神的な豊

かさ”もあるという発見にまでたどりつけずに終わってしまったように思う。

本当に異文化理解だけで終わってしまったのではないだろうか？これだけの教材と題材を持っていたのに、と思うとやはり悔いが残る。“豊かさ”という概念をもっと分かりやすく、目に見える豊かさ、見えない豊かさがあるということを念入りに説明しておけばよかった。

この一連の授業が終わった後、何人かの生徒たちが「先生、今度モンゴルの授業はいつ？」とか「また、やろうね」という言葉をかけてきてくれて、とてもうれしく感じた。私の国際理解教育は、これで終わりではなく、ここからがスタートである。

幸いわが校でも来年度から選択授業数が増え、「総合的な学習の時間」に向けても大きく動きだす。通常の社会科の授業では、思いきりとりくめなかったことができるチャンスである。

今回、たどりつけなかった所まで進んでいきたい。そして日本のODAや青年海外協力隊員などは、まちがいなく生徒が興味を抱く題材だと思うので、私も一緒に勉強し、これから国際社会に羽ばたける生徒を育てていきたいと強く思っている。

MEJ(O)

フォトランゲージ

写真を使って行う参加型のアクティビティ。「どここの国だろう？」「ここに写っている人は何をしているのだろうか？」と疑問点を書き出したり、写真に解説をつけてみる。グループで話し合い、写真を“読み解く”なかから、いろいろな気づきや発見がうまれる。①共感的な理解や想像力を高める ②ものごとの多様などらえかたに気づく ③無意識のうちに持っている偏見や固定観念に気づく ④メディアに対して批判的な見方ができるようになる、という効果がある。

「開発教育実践マニュアル わくわく開発教育 参加型学習へのヒント」開発教育協議会より

開発途上国にどのようにかかわるべきか

— マイナスイメージをゆさぶる授業 —

SOTA KAZUHIKO

曾田 和彦

島根県伯太町立伯太中学校

実践の経緯(1)

この実践は、公民的分野の「地球社会に生きる」の単元の中に位置づけ実施した。

目ごろ接することの少ない、ネパールという国の文化を知ること。開発途上国であるために生ずる貧困や、それにもなっておきてくるさまざまな課題に気づき、解決のための手だてを考えることで、国際理解と国際協力に対して積極的にとりくむ生徒の意欲を高めたいと考えた。

また、たくましく生きる人々の姿を知ること、自分自身の生活をふりかえり、広い視野で物事を考えられる生徒を育てたい。

1. ネパールの文化を知り、開発途上国の抱えている課題に気づく。
2. 先進工業国の日本に暮らす自分たちが、どのように行動すべきか考える。
3. たくましく生きる人々の姿から、自分の生き方を考える。

1時限目

研修前アンケート調査

研修に先立ち、ネパールの首都や人々の様子、生徒たちがネパールについて持っている知識、イメージを明らかにすることを目的に、記述式のアンケートを行った。

その結果、ネパールの首都を「カトマンズ」と

正しく答えられた生徒は約15%と、かなり低い割合だった。

ネパールに住んでいる人々に対しては、「肌の色が黒い」「鼻が高い」「日本人と顔が似ている」「白人」「黒人」という容姿の面での予想が多く、言語については「ナマステ（こんにちは）」というあいさつを知っている生徒が数名いた。宗教については「イスラム教を信じている」と答えた生徒が最も多く、ついで「仏教」が多く「ヒンズー教」「キリスト教」は少数だった。

これらの結果から、生徒は社会科の授業などで直接扱わないネパールという国について、正しい知識を持っていないことが明らかになってきた。

イメージはマイナス

文章完成方式で行ったイメージの調査は、開発途上国に対するマイナスイメージが多数出てくる結果となった。

「ネパールの街角には」という文章に対して生徒が書いたのは、「車がない」「草が生えている」「ビルがない」「動物の死体がある」などの答えだった。生徒はネパールが日本よりも経済面、衛生面で劣っていると想像している様子がうかがえた。

同年代の子どもに対しても、「学校に行っていない」「食事に困っている」「遊んでいる」など、自分たちの生活とはかけ離れた予想をしている生徒が多く見られた。

これらの実態から、生徒がネパールを正しく理

解するためにも、研修の参加にあたって指導者自身が、自分なりの理解を深めることを目的にした。また、それらの経験を写真などで追体験すること
 で、生徒たちの国際理解をうながす必要があると
 考えた。

授業の構成 実施科目 社会科（公民的分野） 対象 中学3年（1クラス35人） 4時間

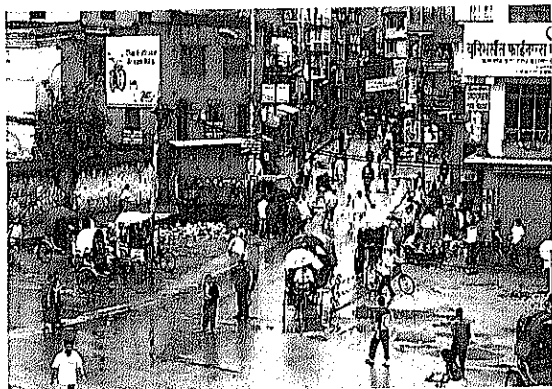
時限	テーマとねらい	方法・内容	使用教材
1	ネパールってどんな国 ネパールへの関心を高める。	1. アンケートで予備知識を確認し、 文章完成法でイメージを明確にする。	アンケート用紙
2	6種類の写真からネパールを知ろう ネパールの生活・文化などをさぐる。	1. 写真からわかることを班でまとめる (フォトランゲージ) 2. 代表者が写真を見せながら発表。 指導者が補足説明を加える。	6種類の写真 (A3に拡大)、 人数分の付せん、班用の 付せん、補足説明用の写 真
3	ネパールの貧しさの原因を考えよう 貧困の背景に教育の問題が存在 することを知り、日本との違い に気づく。	1. GNPの比較から、南北問題の存在、 課題を確認する。 2. ネパールの貧しさの原因について 考え、教育の現状について就学率、 識字率から知る。 3. 貧困と教育の関係を知る。	GNPの比較資料、ネパ ールの純就学率、ネパ ールの識字率の資料、貧困 のサイクル (ユネスコ資 料)
4	日本（日本人、あなた）が開発 途上国に対してできることを考 えよう 国際社会でどのように生きるべ きか考える。	1. 自分たちが行動できる具体的なこ とを考え、発表する。 2. ネパールで夢を持って生きる人々 の姿を知る。	ワークシート、ネパール 青年へのインタビュービ デオ

2時限目

6種類の写真から、ネパールを知ろう

研修後、次の6枚の写真から何がわかるかを班で話し合い、発表した。(フォトランゲージ13p、62p参照)

写真1 カトマンズの街角



それぞれの写真について、生徒から次のような発表があった。

- ・日本でいうと渋谷や原宿のようなにぎやかな所だが、車の数が少ない。
- ・コカ・コーラなどの英語の看板がある。
- ・自転車の人力車のようなもの（リクシャー）がたくさんあることに驚いた。
- ・日本と比べると、道路や建物など整備が行き届いていない感じがする。

写真2 農村の住居



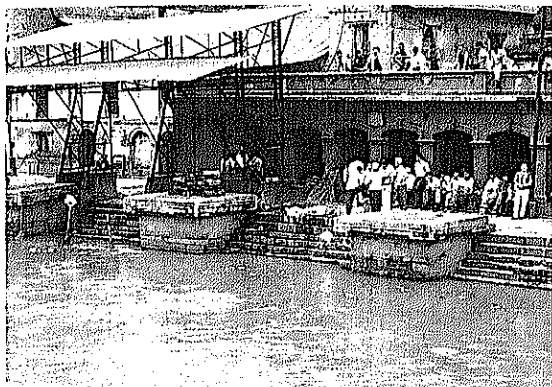
- ・家はすごく古い感じ。泥を使っている。ドアや窓、カーテンなどが無い。
- ・電線がないから電気がないのではないか。
- ・女性はサリーを着ている。おなかが出ている。

写真3 ネパールの農業



- ・日本にもよくある農村の風景だ。
- ・田んぼの草取りを、除草剤などを使わずに、手作業でやっている。
- ・男性よりも、女性の方の人数が多い。

写真4 宗教



- ・人がたくさん集まって、ヒンズー教の儀式をしようとしている。
- ・写真の真ん中の遺体を、左側の木の上で焼こうとしている。
- ・インドでは死体を焼いて、その灰をガンジス川に流すと聞いたことがある。

写真5 ネパールの中学生



- ・黒板が小さく、壁はコンクリート造りで教室内にものが少ない感じがする。
- ・机が長机で、2、3人で1つを使っている。男女別の席に座っている。
- ・教室の中には男子の教の方が多い。女子は学校に行けないのではないかな。

写真6 子どもの生活



- ・子どもがミルクティーを売って、生活費を稼いでいるのではないかな。
- ・道具は古い感じがするが、赤い服を着た子は、腕輪や指輪をしている。
- ・この子たちは学校に行っているのかな？

写真4は、葬儀が行われている風景だが、生徒たちには分かりにくかったようだ。「儀式をやっているんじゃないかな」「真ん中に何か横たわっているね」などと手がかりになる言葉かけをしていった。

生徒たちは、自分の班に与えられた写真や、他の班の写真や発表から、日本とは違うネパールの社会や産業、文化を理解することができた(写真7)。

授業を終えての感想には、日本との比較でネパールの貧しさを感じたものが多かった。

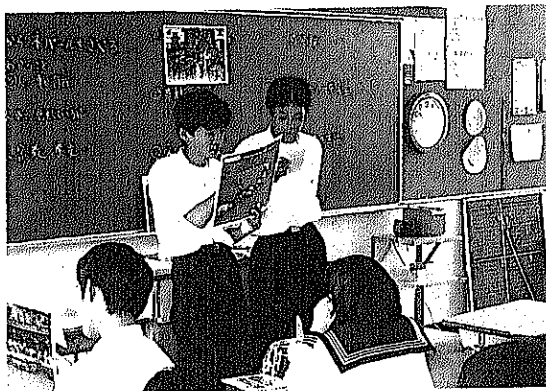


写真7 写真を見て発表をする生徒たち

3時限目

ネパールの貧しさの原因を考えよう

1. 日本とネパールの国民一人あたりのGNPを比較し、前時に生徒たちが感じていた、ネパールの貧困を統計資料から補足する。
2. 南北問題の存在に触れ、その結果生じてくる課題について確認する。
3. ネパールの貧しさの原因を考える。

生徒の考えた原因は、「産業」「政治」「民族」「教育」に集約することができた。

ネパールの現状について、教師が補足説明を加えた後、就学率と識字率を提示した(表1)。日本との大きな違い、特に女子の数値の低さに驚きの声があがった。

ネパールの純就学率(%;1996.JICA資料)

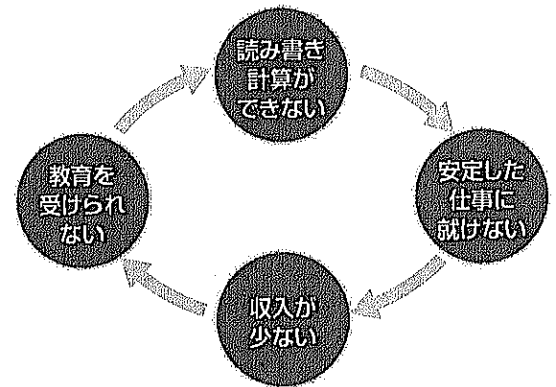
	小学校 (1~5年生)	初級中学校 (6~8年生)	中学校 (9~10年生)
全体	69.4	26.8	18.2
女子	58.7	21.0	13.9
男子	79.4	32.1	22.1

ネパールの識字率(%)
Nepal South Asia Center 1998

全体	36.7
女子	21.3
男子	54.3

表1 ネパールの識字率

4. 貧困のサイクル(ユネスコ資料、下図)を利用し、貧困が教育の機会を奪い、ネパールの人々が安定した仕事に就けないという悪循環に陥っていることに気づく。



4時限目

日本（日本人、あなた）が開発途上国に対してできることを考えよう

1. ネパールの現実をふまえ、先進工業国である日本、そこに住む日本人や自分自身に、何ができるか。また、自分自身はどう生きるべきなのかを考え、発表した。

生徒の考えの一部

- ・私にできることは募金を送ったりすることです。そのほかにも古切手やテレホンカード、書き損じはがきを集めて送ることなどがあります。

カードでものをかうと、その買ったお金が一部資金として送られるというカードがあるので、そのカードを使ってみたいです。

- ・今後、難民キャンプなどについて調べたり、救援活動、国内でもできるボランティアを調べたりして、たずさわっていきたいです。

今できること、食べ物をそまつにしないことにも挑戦しようと思います。

- ・まずは自分で、実際どのくらいの困っている人、難民の人がいるのかを見に行きたい。その上で、今自分に何ができるのか、何をしたらよいかを考えていきたい。

世界中や日本でもおこっている地震等の自然災害に対して、これからの対応や、災害時の金銭補償など、いろいろな面での向上が必要だと思う。

- ・日本の借金が多いのに、援助をしていることで非難もあるようですが、私は援助に賛成です。食べ物に困らない日本、着るものも大量にある日本、ほぼ全員が教育を受けられる日本だから、開発途上国への援助は続けるべきだと思います。

- ・募金に協力するのが簡単で、誰にでもできることだと思います。

紙のリサイクルに協力すれば、原料の木を切っている国の環境破壊を防げると思います。でも、それが結果的に、その国の産業の収入を減らすことになるかもしれないので、難しいところです。

多くの生徒が、政府による援助や、募金活動等への協力が、経済的に豊かな日本の開発途上国へのかかわり方であると考えた。さらに、お金やものを与えるだけの援助ではなく、「自分にできることを考えたい」「行動したい」という意欲の高まりをうかがわせる発言もみられた。

2. ネパールで撮影した青年のインタビュービデオを視聴する

日本語学校で日本語を学びながら、学業や仕事に打ち込む青年の姿に、生徒たちは驚いたようであった。英語や日本語を流ちょうに扱い、夢を語る姿に、これまでネパールに対して抱いていたマイナスイメージをゆさぶられたようであった。

成果と課題

豊かな日本に暮らす生徒にとって、開発途上国の状況を理解するのは難しいことであったように思う。しかし、写真やデータの提示によって、生徒の興味や関心を高めることができた。4時間の実践を通じて、自分の生活をふりかえり、何か行動を起こしたいという発表が多くみられたことから、国際社会の一員としての意識の高まりを感じることができた。

また、地域に開かれた学校をめざす伯太中学校のとりくみの一環として、昨年11月に開催された文化祭において、授業実践の記録を展示することができた。地域の方々にも開発途上国の実態を知っていただく機会を持てたことはよかった。

元気の出る国・中国との出会い

— ビデオを使った「ランキングゲーム」 —

HIROME MIYUKI

廣目 美幸

福岡県田川市立後藤寺中学校

活動のねらい

1. 中国の実情、特に人々との出会いから学んだことを通して、今後の友好関係を築くうえで、日本人一人ひとりがどうあるべきかを考える。
2. 「中国の小・中学生」「青年海外協力隊員」の生き方、将来の夢などを知ることを通して、国際協力のありかたを考えさせる。

授業の構成 実施科目 国語科 対象 中学2年（3クラス30人） 5時間

時限	テーマとねらい	方法・内容	使用教材
1	中国への質問 中国への興味を持つ。	「中国の小・中学生に聞いてみたいこと」を考える。	アンケート
2	中国を知ろう1 中国の実情にふれる。	1. 質問の答えを探す。 2. 心に残った事実をランキングする。	写真、本、パンフレット
3	中国を知ろう2 中国の実情にふれる。	1. ビデオを視聴する。 2. 心に残った事実をランキングする。	ビデオ（中国で撮ったものを編集）
4	豊かさとは 豊かさについてふりかえる。	1. 豊かさについて発表する。 2. 豊かさの違いを考える。	ワークシート「授業に役立つ総合学習の手引き」（JICA）
5	行動しよう 自分にできる国際協力を見つける。	1. 国際協力について知る。 2. 自分ができていることを発表する。	ワークシート、教科書、パンフレット

1時限目

中国への質問

中国についての学習は、1年生では未習であるが、2年生では、地理の授業で、すでに学習している。そこで、中国への興味を持たせるため、「中国の小・中学生に聞いてみたいこと」について、アンケート調査をしたところ、次のような質問があがった。

〈食〉おいしい料理が知りたい (1年)

〈学校〉 一日の授業時間、何教科あるのか、むずかしい勉強、どんな勉強をするのか、学校のしくみ・設備、生徒の人数、制服、給食はあるのか、学校には歩いていくのか (1年)

学校で少林寺拳法を習うのか、流行っている遊び、おこづかいは何に使う、将来の夢、漢字のおぼえ方 (2年)

〈生活〉 ゲーム、テレビ、マンガ (1年)、家でどれくらい勉強するのか (2年)

〈日本〉 日本の女子高生のような髪型、ファッションをした人はいるのか (1年)、日本をどう思うか、日本語を勉強しているか、日本の政治家について (2年)

〈社会〉 自転車通勤なのはなぜか、まんが雑誌は何元、困ること、日本にない仕事、服、仕事上の苦勞、人気のある歌手、使って便利なもの、所得による差別はあるか、年中行事、民族衣装、スーパーで売っているもの、クーラーはあるか、1日何時間働くのか (1・2年共通)

項目は、あとで教師が分類した。質問の内容にも、中国への理解度、自分の生活の様子が表れている。「隣の国で言葉は違うけどなんとなく日本と似たような所」というようなあいまいな印象を変え、少しでも興味・関心を持ってもらいたいと感じた。

2時限目

中国を知ろう1

自分が出した質問の答えを見つける

写真、本、パンフレットなどを展示し、一時限目のアンケートで自分や友だちが出した「中国への質問」の答えを探していく活動をした。

ねらいは、写真から受ける第一印象や、自分の価値基準だけで判断しないよう、「見方」を知ってもらうことだ。

そこで何枚かの中国の学校の校舎の写真の例にあげ、学校ができたいきさつ、先生や生徒、保護者の願いを紹介し、第一印象と比べさせた。その後再び写真を見せると生徒たちは説明を読んだり、友だちと話したり、私に質問しながら答えを見つけていくようになった。

ただ、写真やビデオは真実の一部分にしかすぎない。そこで、見えているものだけで判断するのを避けるため、写真には次のように説明を書き加えた。(写真1~4) しかし、「すごい!」と思ったり、「これ何だろう?」と感じたりする驚きも必要だと思い、いくつかの写真には説明を書かず、最後に「答え」として掲示した。見やすいよう視聴覚室に写真を張り出した(写真5)。

心に残った事実をランキングする

ワークシート(図1)を使い、心に残った事実を順番にランキングすることで、中国に対する印象を深めるのがねらいである。ランキングする視点は各自にまかせたため、生徒たちは「はじめて知ったこと」「驚いたこと」「興味がわいたもの」など、自由にランキングしていた。

フォト・ドキュメント 「元気の出る国・中国との出会い」

はじめに

これは私の目を通して見た中国です。真の中国のほんの一部分にしかすぎません。中国は広い国です。そして歴史のある国です。ですから、見えているものだけで判断するのではなく、自分で調べたり、確かめたりしてほしいのです。そしてそこから世界の現状、日本の現状にも目を向けてほしいと思います。

はじめは、「日本にないもの」に圧倒されました。見たことがないということは人間の好奇心をこれほどまでに刺激するのでしょうか。しかし慣れてくるにしたがって、ものにとらわれている自分に気がきました。「日本にあるかないか」という比較ではなく、ものを生み出した人間のすばらしさに気づかされたのです。

次に感じたのは、言い表しようのない“なつかしさ”でした。砂ほこりのなかを自転車で家路につく人々、ゆったりと夕すみを楽しむ人々、わいわいと遊んでいる子どもたち。いつかこんな思いをしたような…。そんな“なつかしさ”です。人々のふれあいのある街に対するなつかしさかもしれません。もしかしたら日本人が前へ前へと進むことで忘れてしまったものではないのでしょうか。そしてその思いはさらに多くの人々とふれあうことで深められました。

厳しい状況の中で、将来に希望を持って明るく過ごす子どもたち、日本に行きたい、日本人に会えてよかったと言ってくれた人々。人とのふれあいを通して感じたこと、学んだことをみんなにもぜひ伝えたい、そんなことを強く感じた旅でした。

あなたも自分の生き方をもう一度ふりかえてみませんか。



写真1 貴州の中学生と
サマースクールで故宮に来ていた中学生です。「私たちの名前、日本語で何と言うの？」と聞かれて名前を中国語で書いてもらいました



写真2 中国人民抗日戦争記念館で
私たちの突然のインタビューに、来館していた子どもたちはとてもはきはきと答えてくれました。「中国と日本の戦争のことは学校で習って知っていたが、日本人のしたことが、これほどひどいとは思わなかった。日本の中学生にも知ってほしい。そしてこれからは、友好関係を築いていきましょう」と語ってくれました



写真3 武陵大学で日本語を学ぶ学生
日本語を学ぼうとしたきっかけをたずねました。張敏さん「おじさんが大阪にいて日本人がとても親切だと聞いた。風景と民族習慣にひかれました」



写真4 武陵大学で
青年海外協力隊員として日本語教師を勤める関根さん。「かつて中国を侵略した国のことば“日本語”。複雑な状況の中で自分を慕ってくれる生徒たちのためにがんばっています」。霍(カク)さんには「西遊記」や中国のアニメについて教えてもらいました。「故郷のために私の日本語を役立てたい」という彼女。私は、そしてあなたはどんな生き方をしていますか？

図1 授業のワークシート

国語科発展学習「国際化の中で」

テーマ 元気の出る国～中国との出会い

＜中国ってどんな国＞

①心に残った写真をランキングしよう。
写真、実物を見て

1	1
2	2
3	3
4	4
5	5

ビデオを見て

②思っていた中国と、写真やビデオ、実物とでは、どちらが良かったですか。

＜深めよう＞

①②を合わせて、あなたが一番心に残ったことをまとめてみましょう。

＜行動しよう＞

「国際化の中で」の学習を通して、自分が行動してみたい（もっと知りたい、調べてみたい）と思ったことを書きましょう。

図1 授業のワークシート

3時限目

中国を知ろう2

ビデオを見ることで、より深く中国の実情にふれてほしい。特に2年生で関心の高かった「日本語を勉強している学生がいるか」という疑問に答えたかった。ビデオを視聴した後でも2時限目と同じようにランキングし、写真のランキングと比べてみた。

＜ビデオの内容＞

- ・北京国際空港から北京市内へ
- ・華都飯店と道路
- ・車の渋滞
- ・万里の長城
- ・天安門広場と故宮
- ・北京市内の小・中学校の生徒

- ・張家界の町並、市場
- ・希望工程の小学校

- ・武漢大学で日本語を学ぶ生徒、と青年海外協力隊員

（同グループの植木章江さん、佐藤みどりさん撮影）

生徒の反応

ワークシート1

「心に残った事実」ランキングの結果

＜写真・実物編＞

- 1位 北京市動物園のパンダ
- 2位 北京市内の学校の教室
- 3位 日本の印象を語る生徒
- 4位 将来の夢を語る中学生
- 5位 張家界の田園風景

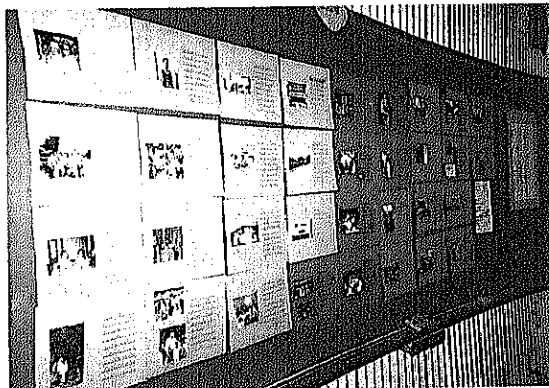


写真5 22ページの写真の展示例

＜ビデオ編＞

- 1位 桑植県の希望工程小学校
- 2位 万里の長城
- 3位 張家界の市場
- 4位 日本語を学ぶ学生たち
- 5位 マクドナルドとケンタッキー

写真のランキングでは中国を「パンダ」などのイメージでとらえがちだが、ビデオを視聴させると、現実味が増したのか、その後、中国に興味を持つ生徒が増えてきた。

ワークシート2

「思っていた中国とのちがい」の生徒の記述から

- ・ 一生懸命勉強している様子がわかった。
- ・ 自然が多く、日本と似た建物（木）もあった。
- ・ 日本より発展しているところや、中国の中でも、ちがいがあることがわかった。
- ・ 人々の様子まで知らなかったなので、礼儀がよくて心あたたかく、何事にも希望を持って一生懸命な国だと思いました。

ワークシート3

「深めよう」の記述から

- ・ 子どもたちは遊び道具もあまり買ってもらっていないのではないかと思った。それなのに、何事も前向きに行動する中国の人はすごい。日本人も見習わなくてはと思う。
- ・ ビデオでは中国の人が「日本がいい」と言っているけれど、そんなによくはないと思う。それは留學生が殺された話を聞いたからです。日本人として恥ずかしくなっていました。早く留学したい人が安心できる日本にしたいです。
- ・ 昔、大きな戦争があったので、「中国の人は日本に来ることはいいとは思ってない」と思っていたけれど「来たい」と言ってくれたのでうれしかった。
- ・ 自分が今まで甘えた生活をしてきたなあと思いました。私は彼らのことを「えらい」と思うけれど彼らにとって今までの生活は当然のことなのかもしれないと思いました。
- ・ 出迎える時の様子から、みんなやさしそうな気がした。日本人は外国人が来たとき、あんなに

やさしくできただろうかと思った。

- ・ 中国の人は、みんなにこにこしていて、街の様子とかをみているとなんか落ち着いていてほっとする感じがします。中国は日本と違ういいところがたくさんあると思いました。（写真は全然ランキングできなかったのにビデオを見ても感動していました。）

ワークシート4

「行動しよう」の記述から

- ・ 中国の小・中学生と接してみたい。中国語や中国の遊びを教えてもらいたい。
- ・ 日本語を勉強している人と文通してみたい。
- ・ 中国の建物や文化、食べ物などをもっと調べてみたい。
- ・ どんな募金やボランティアがあるかもっと知りたい。

4時限目

「豊かさ」とは

現代日本人の価値基準である「豊かさ」についてふりかえる。「授業に役立つ総合学習の手引き 平成11年度中学校教師海外研修に参加して」(JICA) を読んで考える。

5時限目

行動しよう

自分にできる国際協力を見つける。まず「国際的視野」について考えるため、カードプレーストーミングを行った。

テーマは「日本人が国際的視野を持つにはどうしたらいいだろう」生徒に自分の考えたことをB5用紙に1項目ずつ書かせ、書き終わったところで項目を分類していく。「学ぶ」「交流する」「調べる」などのカテゴリーに分類して模造紙に貼り付けた。

参考に、2年国語科教科書（三省堂）から、高野孟の「一枚の地図」を読ませた。

「われわれが個人の経験と興味と日常の中から作った『世界地図』は、せいぜい日本地図の枠から大きく広がるのが、あまりない。（中略）世界地図は、日本人が国際的視野を持つための入門教材と言えなくもない」

国際協力について知ろう

JICA発行のパンフレットなどを紹介しながら、自分にできる国際協力を考えた。紹介した主な団体は次の通り。

- ・中国の非営利団体「中国青少年発展基金会」の「希望工程」（貧困地域の教育条件の改善を援助するプロジェクト）
- ・雑誌「国際協力」（JICA）
- ・日本国際ボランティアセンター（JVC）
- ・日本ユニセフ協会

感想と所思

この授業実践で一番苦労したのが、資料づくりである。写真やビデオ、実物すら真実の一部にしかすぎない。また私の見方が果たして正しいのか、という不安もあった。そこで、見えているものだけで判断してしまうことを避けるため、写真には説明を書き加えた。

中国に対してあいまいな知識、興味、経験しか持たないと思われた生徒たちは、これらの活動を通して、想像だけで判断していた部分があったことに気づいたようだ。また中国の「もの」への興

味だけでなく、次第に「人々の心」に気づいていたことが感想からうかがわれる。

ビデオや私の話、写真だけでどこまで伝えられるだろうかと心配したが、「中国の人はやさしい、明るい」ととらえてくれたこと、外見や思い込み、物の豊かさにこだわらず、人の様子を見てほしいという私の一番伝えたい部分をわかってくれたことがうれしかった。それほど今回の中国での出会いはすばらしいものであったし、生徒たちの感性もすばらしいと思った。このことをきっかけに国際理解教育を少しでも学校現場に広げていきたい。

今回の課題は、中国の国内格差の問題、国際協力や援助、日本との戦争について深めきれなかったことだ。この内容は歴史・公民分野ともかかわりがあるので、社会の先生との連携も考えている。今回の実践を通して感じた、「国際理解・協力は人とのふれあいから」ということを、今後、この課題の解決に生かしていきたいと思う。

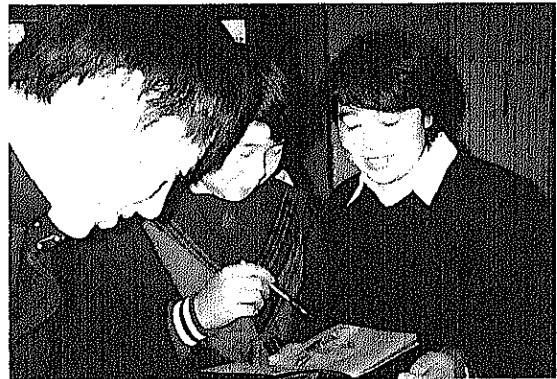


写真6 中国で買ってきた絵本「ライオンキング」を読む生徒。中国語は読めないけれど助でみごとに訳せた

手紙で伝えよう！ 私たちのことを

— ネパールの子どもに文房具を送るまで —

UCHIYAMA AKEMI

内山 朱実

山口県防府市立華西中学校

ネパールの子どもの声

私は本校で4年間、選択教科「国際理解」を担当して試行錯誤を重ねている。始めのうちは、単に外国について調べたり、留学生との交流をしたり「異文化を知る」というところで終わっていた。

これからはそこにとどまるのではなく、日本と世界の国々が密接に結びついていることを認識し、地球市民の一員として地球的な問題について考え、自分なりの解決策や自分がそのような問題にどのようにかわっていくかなど、追求することが大切なのではないだろうかと考えた。

本実践では、事前に日本を紹介する手紙を生徒たちに書かせ、研修で訪れたネパールの学校の生徒や先生に手渡すことにした。現地のハズリー先生から返事をいただいたことがきっかけとなり、生徒たちは「ネパールの子どもたちに文房具を送ろう」という活動を全校によびかけたりするなど、文化祭での啓発活動に結びつけていった。

授業の展開

1時限目

無人島ゲーム

無人島で必要なものを6枚のカードに各自が記入をする。班ごとに話し合いをし、必要不可欠なものを10個決定し、その理由も含めて発表をする。ベーシック・ヒューマン・ニーズ（BHN、31p参照）が欠如することは人間としての権利が満たさ

れていない状態であることや開発途上国の多くはBHNが満たされていないことを理解する。

2～3時限目

JICA制作のビデオ「ODAって何だろう」を視聴し、開発途上国の実態を知るとともに日本が戦後、国際機関から援助を受けていたことや現在の日本の援助のあり方とおして、国際協力について考える。

ビデオ視聴後の生徒の感想

- ・ぼくは、ODAについてあまり知らなかった。でも、ビデオを見てODAはどのような援助をしているかわかった。そして、その援助でどのような人たちが助かるかわかった。例えば内戦で傷ついた人たちに援助をしたり、水道がない村に水道をつくるなど、すばらしいことをしているのだと思った。
- ・ODAは南米の開発途上国に対して、いろいろな支援をしていた、日本は160もの国に援助をしているということを学んだ。橋やかんがい用水、医療器具などの援助をしていた。これからも、協力を続けていってほしいし、自分ができることを考えてみたいと思った。

時限	テーマとねらい	方法・内容	使用教材
1	無人島ゲーム 無人島で生活することを想定して本当に必要なモノは何なのか。BHNが満たされていない開発途上国の生活について考える。	1. 無人島に必要なモノを6枚のカードに記入する。 2. 班で話し合い10個の必要不可欠なものを決定し発表する。 3. 基本的な生活を送るために必要なものについて考える。	「中学校国際理解ファックス教材集」（明治図書）
2~3	ODAって何だろう？ 開発途上国の実態を知るとともに、国際協力や援助について考える。	ビデオ「ODAって何だろう？」を視聴し、感想を書いたり、国際協力について考えたりする。	ビデオ「ODAって何だろう？」（JICA）*
4	多様な見方ができるようになる 自分の国の文化や社会からの視点を唯一のものと考えず、違う立場の視点にたって物事を見るということについて考えさせる。	資料の図がどのように見えるか話し合う。物の見方が周囲の状況や見る角度で変化してくることを確認させる。	「中学校国際理解ファックス教材集」（明治図書）より「別の角度から見てみよう」
5	気になる写真 開発途上国の多様性や途上国に対する私たちの固定観念や偏見に気づく。	フォトランゲージで開発途上国の人々の生活について考える。	「中学校国際理解ファックス教材集」（明治図書）、「地球家族」フォトランゲージ版（TOTO出版）
6~7	ネパールってどんな国 ネパールについて知っていることを挙げさせた後、基礎情報を与える。	ネパールに関するホームページをもとに、ネパールについて学ぶ。	ホームページ「ネパール×ネパール」 (http://www.nepal.co.jp/)
8~11	伝えよう！わたしたちのことを ネパールの生徒たちに日本の文化や中学校生活について紹介する英文を作る。	各班ごとにテーマを設け、日本の文化や生活について紹介する英文を作る。	「英語で紹介する日本の年中行事」（ナツメ社） 「中・高生のための英文手紙の書き方Let's write a letter in English」（郵便友の会）
12~13 (2学期、研修後)	本当の豊かさって何だろう？ 途上国に対する偏見を排除し、本当の豊かさについて考える。	ネパールで撮影したビデオを見せたり、ネパールのよさについて話をしたりする。	ネパールで収集した絵葉書、ネパール人の先生から届いた手紙、ネパールで撮影したビデオ
14~22	わたしたちができること 地球の抱える問題について各自が課題を設定し、資料収集や調査などを通して追究をし、それらの解決策を自分なりに考察する。	一人一課題を設定し、書籍やインターネットを用いて調査をし、レポートを作成する。	「国々の前進」「国際協力」（JICA）、「ユニセフ子供白書」（日本ユニセフ協会）、JICA (http://www.jica.go.jp) やユニセフ (http://www.unicef.or.jp) のホームページ

*巻末資料参照

6～7時限目

ネパールってどんな国

ネパールと聞いて思い浮かべることや、ネパールについて知っていることを生徒にあげさせたところ、「ヒマラヤ」、「ヒンズー教」ということぐらいしか出てこなかった。私も最貧国の一つということぐらいしか、知らなかったのであるが…。その後、ホームページを印刷したものを配布し、ネパールの地理、気候、言語、宗教、食べ物など基本的なことについて話をした。

8～11時限目

伝えよう！私たちのことを

ネパール研修中に学校を訪問し、日本の様子を伝える授業を行うということ聞き、次のようなとりくみを行った。

各班ごとにテーマを設け、日本の文化や生活について紹介する英文を書き、写真や絵を用いたレポートを作成した。自分が英語教師ということや英語を得意とする生徒が数人いたということもあり、英文で日本紹介の文を書かせることにした。未習語も多く、辞書や日本を紹介した英文辞典などを用いて悪戦苦闘しながらどうにか仕上げることができ、ネパールへ持参した。

訪問したダルバールスクールの7年生は、英語はよくわからないということで、訪問時はじゃんけんや折り紙の紹介という程度で終わってしまったが、教室に手紙を掲示して活用してほしいということをお願いした。

日本を紹介する各班のテーマ

- ・日本の中学生の一日
- ・日本のスポーツ（弓道、すもうなど）
- ・日本食（かやくご飯とみそ汁）
- ・日本の遊び（折り紙、こま、たこあげ）
- ・日本の年申行事
- ・本校の様子について

英文を書いた生徒の感想

- ・英語で日本のことを紹介するというのは難しかった。案外、日本についてわかっていないということを改めて感じた。日本人として、日本について学ぶということも大切なことだと思った。

12～13時限目

本当の豊かさって何だろう？

帰国後、ネパールで撮影したビデオを用いて、ネパールの抱える問題点だけでなく、子どもたちのいきいきとした表情や人と人とのふれあいや心のあたたかさなどについて話をし、ネパールの人々の心の豊かさについて考えさせることにした。また、現地の懇親会で知り合った、ジャンジャグリスクールのハズリー先生からいただいた手紙を紹介したところ、ネパールの山岳地帯の子どもたちに文房具を送ろうという声上がり、文化祭で啓発活動を行うことにした（写真1）

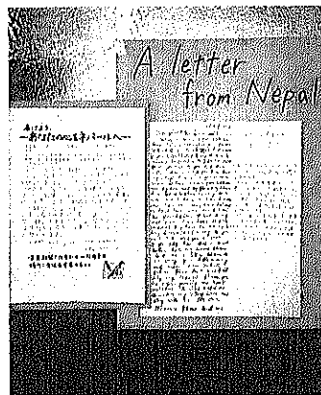


写真1 ネパールからの手紙と文房具の収集を呼びかけるポスター

ビデオ視聴後の生徒の感想（抜粋）

- ・私たちは毎日勉強することが当たり前だけど、毎日家の手伝いや家計を助けるために、お金を稼ぐことだけで終わる子どもがたくさんいることがわかった。私たちの少しの援助でもたくさん子どもたちが勉強できて、その子どもたちによってその国の社会やその国の人々の未来が

明るくなるのなら、大切なことだと思う。どんな国に生まれることがあっても、同じ夢を持つことや、自分のやりたいことがかなえられる世界になるといいと思う。

- ・ネパールは開発途上国で、日本に比べてないものもあるけど反対に日本にないものを持っているのではないかと思った。一日一日を一生懸命に生きるというのは、大変かもしれないけれど、もしかしたら、なんとなく生きている私の一日より楽しいのかもしれないと思った。
- ・「ぼくたちは恵まれすぎている」と一番最初に思った。当たり前のように食べ物を残して、学校で勉強をしている。恵まれすぎているのでありがたみがわからない。だから、もっと物を大切にしていきたい。僕たちに欠けているものをネパールの人から学んだような気がする。ネパールの人たちがとても心が豊かで、すばらしい笑顔をしているのは毎日がんばって生きているからだと思った。

ハズリー先生からの手紙（抜粋）

My village town is in far western region. It takes 19 hours from Kathmandu by bus but by plane only 2 hours. There school conditions are very low. Even students have no room to study when rain falls they have holidays. No bench table. Some class sit on the ground, some students bring mat from their home, so poor conditions they have no money to buy books, pencils, copy. If you want I can send you a Photo.

If you help them that is much better than our school. please send me a letter please do not worry. Your little money will make more students future. Please don't mind. It's only my request.

（私の住む村は、カトマンズから徒歩で19時間、飛行機なら2時間ほどの西部に位置しています。教育条件は悪く、雨が降ったときに勉強する教室すらないので、そういうときは授業は休みになります。机やイスもなく、生徒は床に座ったり家から持ってきたマットに座ります。彼らには本や鉛筆を買うお金はありません。確かめなければ写真をお送りしましょう。あなたの力が、学校がするよりも彼らの助けになります。気にせず手紙をください。あなたがたのわずかなお金が生徒たちの未来をひろくです。）

14～22時限目

私たちにできること

今までの学習を通して、世界には地球規模の問題があり、国際機関やNGOがそれらの解決に向けてさまざまな取り組みをしていることを学んだ。さらに掘り下げて追究したい課題を各自が設定し、書籍やインターネットを用いて多角的に調査した結果を模造紙にまとめ、文化祭で展示することにした。各自の興味に従って以下のような課題を設定した。

研究課題

- ・地雷問題について
- ・国際協力について（JICAの取り組み）
- ・ユニセフについて
- ・南北問題
- ・地球の温暖化について
- ・少年兵問題
- ・NGO活動の実際
- ・アジアの教育
- ・熱帯雨林との共生
- ・海洋汚染について
- ・人口問題と食糧問題
- ・開発途上国の医療
- ・開発途上国の実態（ネパール）
- ・地球の砂漠化
- ・絶滅する動物たち



文化祭でのとりくみ

国際理解のとりくみの発表と他の生徒への啓発活動の場として、一教室を使って、次のようなものを展示した（写真2）。

- ・日本ユニセフ協会から借りたパネル（世界の寺子屋）
- ・ユニセフから送ってもらったポスター（ユニセフってなに？ 子供の人権を守ろう）
- ・青年海外協力隊員としてジンバブエに赴任した岩崎氏から借りた写真、楽器、民芸品など。
- ・ネパールで撮った写真、購入した民族衣装（サリー、パンジャビスーツ）、絵はがき
- ・ハズリー先生からの手紙
- ・生徒が作成した上記のレポート

レポート作成後の生徒の感想

- ・いろいろ考えながら書いたレポートは大変だった。でも、あのレポートは自分にとっていろいろと勉強になった。世界にはさまざまな問題があることを知り、自分ができることから始めていきたいと思った。「国際理解」を選択して本当によかったと思った。
- ・私は地球の砂漠化について調べたことで、世界規模の問題でも自分たちにできることが必ずあり、その問題が自分と関係がないように思われても、どこかで必ずつながりがあるということ

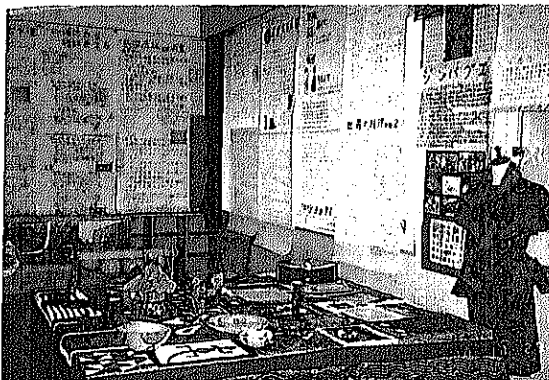


写真2 文化祭でネパールについて展示した

がわかったことが、大きな収穫だと思う。どんなに小さくても自分にできることをみつけて、自分なりにその問題が解決されるようにがんばることはできると思うし、大切なことだと思った。

- ・世界にはたくさんの国があって、名前すら知らない国がある。国際理解の学習を通して、もっと世界のことに目を向けたいと思った。同じ人間、同じ地球の仲間として、尊重し合うことが、国際理解の第一歩ではないだろうか。

成果と課題

この実践は、選択教科「国際理解」において、週2時間（6月中旬から10月まで）の中でとりくんだ。最後は時間不足となり、レポートを文化祭で展示するのみで終わってしまい、発表の時間を設けてディスカッションをしたり、さらに深めていくことができなかったことが反省点としてあげられる。

また、国際理解教育の大きな目標の一つに、自分自身の生活のあり方を見直すことが大切であるといわれるが、地域や自分たちの生活と結びつけて考えさせるという点では不十分であったように思う。

教科で発展させた取り組み

教科（英語）では、本校で使用している2年生の教科書「NEW HORIZON」（東京書籍）に「A sister in Africa」という、フォスタープランでアフリカの女の子を支援しているという読み物教材があるので、2年生を担当している先生にお願いをし、授業でネパールの子どもたちに手紙を書くという活動を取り入れた。文房具を送ったネパールの生徒たちからお礼の手紙が届いたこともあり、今後は文通を通して心の交流が始まることを希望している。

3年生の教科書には「What is in Our Future?」という教材がある。青年海外協力隊員やNGOボランティアとして海外で活躍している人が増えてお



写真3 ネパールへ送る文房具の仕分けをする生徒たち

り、人口問題や食糧問題等、世界全体で取り組んでいかなければならないという内容である。そこでは、西アフリカのガンビアでNGO活動にとりくまれている方に国際協力についてお話ししていただくことにしている。

地球市民の視点を育てる

また、3年生の道徳の時間では、「ほくも力になりたい」という資料を通して、地球市民という視点から国際協力について考える時間を設けた。その他にも、人類愛や国際協力をテーマにした資料

があるので、さらに心情面を育てていくということも大切だと思う。

本校でも、来年度から全学年で「総合的な学習の時間」が導入される。国際理解教育は、環境、人権、平和などさまざまな要素を含んだ21世紀に必要な分野であると言えるだろう。生徒の実態をふまえて、つきたい力を明確にし、「総合的な学習の時間」で、国際理解教育にどのような手法でとりくんでいくか、自分自身の研さんはもちろんのこと、校内研修の推進やネットワークづくりも今後の課題である。

MEMO

ベーシック・ヒューマン・ニーズ (basic human needs : BHN)

人間としての基本的なニーズ。食糧、住居、衣服などの最低限の必要物資や、安全な飲料水、衛生設備、公共輸送手段、保健、教育など地域社会に不可欠なサービスのこと。

写真からネパールの実情を知ろう

— コミュニケーション能力を高める「フォトランゲージ」—

YAMAMOTO TOKIYO

山本 朝世

広島県湯来町立砂谷中学校

「フォトランゲージ」

「フォトランゲージ」とは、写真を読むことで自分が見過ごしていたり、気づかなかったことを発見し、写真の中の社会と自分の生きる社会、二つのつながりに気づいてみようという開発教育の手法の一つだ（13p、62p参照）。

コミュニケーション不足が指摘される生徒たちに、フォトランゲージで話し合う中からグループの中で自分の考えをまとめ、人の意見を尊重できるような自尊感情を育てたい。そして、ステレオタイプの間人が多いといわれる日本人が、開発問題、人権問題、国際問題などを考えていく中で、グローバルに物事をとらえられるようになってほしいと考えた。

授業の目的

今回の研修で撮影した写真を活用した「フォトランゲージ」を選択教科「国際科」の4回目の授業で試みた（34p参照）。生徒に期待したことは次の点である。

- ・情報源をよく観察する。視点や考えを考察・評価する。
- ・写真の中の状況や立場になって感じ、考える。
- ・自己表現の機会を持つ。
- ・他人の表現を評価し、刺激しあう。個々人の相違に気づき、相互理解を深める。

準備

- ・ネパールの研修で撮った写真のうち、共通性のあるものをあらかじめ3枚1組として、1枚のカラー印刷でプリントアウトしておく。たとえば、宗教・学校・子ども・人々・街角など。今回は8組（プリント8枚）を用意。それをグループの数分カラーコピーをする。（例として、写真1～4は4組分）。
- ・発展途上国の困難な状況のものばかり集めないで、生徒の興味をひく写真があることが望ましい。
- ・JICA作成のGNPのシェアを示した地図（図1）やメルカトル図法の地図を用意した。

導入

- ・生徒を4人のグループに分ける。各グループに世界地図を配り、地図の違いについて考えさせる。

写真を読む（10分）

- ・各グループに8組（プリント8枚）のカラーコピーを配る。
- ・興味を持った、あるいは気に入った写真を1枚選ぶ。
- ・選んだ写真から読み取れること、そしてもっと知りたいこと、疑問に思ったことをワークシート（図2）に書き出す。

ディスカッション (30分)

- ・グループ内で互いに「なぜその写真を選んだのか」「写真から読み取れることは何か」などの意見交換をする。(10分)
- ・各グループから1枚を選び、有名な写真誌にそれを売り込むとしたら、どんなキャプション(題・見出し)をつけるか、グループでまとめて発表する。(15分)
- ・各グループごとに、写真のなかの人物にしゃべらせ「吹き出し」をつける。授業者は、生徒からの写真に関する質問にはいっさいこたえず、生徒の活動を見ておく。(5分)

写真の解説とまとめ (10分)

- ・授業者がそれぞれの写真について解説する。各グループのキャプションや吹き出しについてもコメントする。ネパールで実際に見てきた体験を話すか、かたよった授業者の知識を押し付けないように注意する。

ネパールの子どもが写っている写真から、義務教育の制度を説明したり、青年の様子から平均寿命について話すようにした。
- ・人間貧困指数(HPI、右参照)について紹介する。

成果と課題

フォトランゲージはコミュニケーションを重視する授業なので、ふだん寡黙な生徒がグループ内とはいえ活発に意見を言っていたことが一番の成果である。感じたことを自由に発表し、反応を共有できたのではないと思う。お互いの意見もよく聞き、尊重し合っていた。

ただし、ネパールで撮ってきた写真に片寄りがあり、かえって偏見を生みはしないかと思った。

写真は、日ごろから写真誌(「アサヒ・グラフ」「LIFE」やユニセフなど)から集めておくべきだと思った。できるだけさまざまな状況の写真があるほうが望ましい。私自身がネパール研修中に問題だと思ったこと、「義務教育制度がなく、進級できないために退学者が多い」「高校卒業資格者の合格率が45.8%しかない」「ネパール全体の識字率は36.7%しかない」「小学校の就学率が男女で20%もの差がある」「階級制度“ザート”が存続し職業を選ぶ自由がない」「ヒンズー教のため牛が神であり、ゴミ収集は週1回しかない」「平均寿命が51歳」「訪問した学校は40人クラスで、ホームルームや道徳などの特別活動はない」「貧しさの中に豊かさを知る」などは伝えられたと思う。

参考文献

「新しい開発教育のすすめ方」
開発教育推進セミナー編 古今書院
「地球家族」ピーター・メンツェル TOTO出版
「国際協力」2000年5月号 JICA

MEMO

人間貧困指数(HPI)

UNDP(国連開発計画)では、貧困を所得だけでなく、人間らしい生活のための選択と機会が奪われていることを貧困ととらえたHPI(Human Poverty Index:人間貧困指数)を提示している。具体的には寿命、知識、人並みの生活基準、という、人間生活の3つの本質的要素のはく奪状態に着目してはじきだしている。

UNDPが発行している「人間開発報告書1999年度」版では、最下位から並べると、ニジェール、ブルキナファソ、シエラレオネ、エチオピアであり、これらはすべてHPIが50%を超えている。

(「国際協力」2000年5月号 JICA より抜粋)

授業の構成 実施科目 選択教科「国際科」 対象 中学3年（1クラス16人） 15時間（うちフォトランゲージに1時間）

時限	テーマとねらい	方法・内容	使用教材
1	外国の中学生にEメールを送ろう	日本の中学生の趣味などの紹介。	学校訪問で交流したネパールの中学校のEメールアドレス
2	インターネットで開発途上国について調べよう	ヤフージャパンのJICAの任国情報から教育・衣食住のまとめ。	東南アジア用のレポートプリント
3	Eメールの返事を書く。開発途上国調べの発表	近隣の国の問題を考えさせる。	まとめのプリントのコピー
4	フォトランゲージでネパールの実情を知る	さまざまな世界地図を見せる。フォトランゲージでネパールの生活を考えさせる。	ネパールで撮った写真、GNPシェアの世界地図（JICAパンフレットより）
5	ビデオ「ネパールの神々に遭った娘たち」視聴	ネパールの医療、宗教問題を考える。	ビデオ（JICAより借用）*
6	Eメール交換	ネパールの中学生との交流。	コンピュータ
7	ビデオ「青年あり、日本より来たる」視聴	ODAとは何か、先進国の役割を議論しあう。NGOとは何かを考える。	ビデオ「アキラ先生の国際協力」（JICAより借用）
8	無人島ゲーム	BHNについてシュミレーションする。	「新しい開発教育のすすめ方」（古今書院）
9	非識字体験	広島電車の路線図をハングル文字で書き、非識字を模擬体験する。	
10	Eメール交換	ネパールの中学生生活を考えさせる。	コンピュータ
11	貿易ゲーム1 南北問題を考える（講義）	「なぜ南は貧しいか」を講義する。	ワークシート
12	貿易ゲーム2	実際にゲームを行い考察する。	「新しい開発教育のすすめ方」（古今書院）
13	Eメール交換	日本とネパールの違いを知る。	コンピュータ
14	シュミレーション「ラオス農村の開発」	「開発問題とは何か」を考える。	「授業に役立つ総合学習の手引き」（JICA）
15	フォトランゲージで国あてゲーム	フォトランゲージで国あてゲームを行う。考えたことの交流。	「地球家族」（TOTO出版）、推量用の世界地図

*巻末資料参照

世界のGNPシェア地図

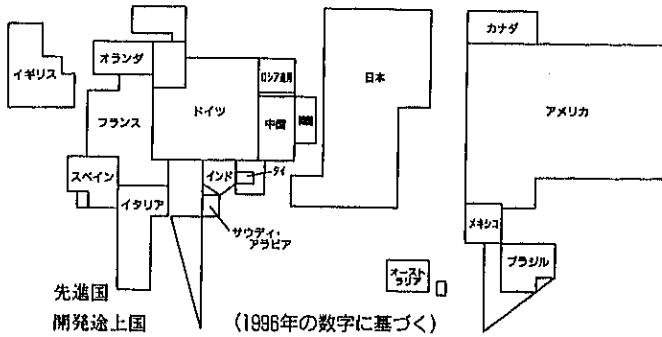


図1 導入で使った地図

ワークシートNo.1

年 組 番 氏名

1 この写真の中で、あなたが一番気に入ったものあるいは一番興味をもったものはどれですか。それはなぜですか。

2 選んだ写真から何が読めますか。

その写真についてもっと知りたいことや疑問に思ったことを書き出してみましょう。

3 あなた自身その写真を撮った写真家だと仮定して、有名な写真誌にそれを売り込むとしたら、どんなキャプション（題・見出し）をつけますか。自分のものとグループ内で出たものすべてを書き留めておきましょう。

記号（ ）

グループ内で意見調整して、1つのキャプションをつけましょう。

4 写真の中の人やものの気持ちを「セリフ」で表しましょう。

図2 「フォトランゲージ」の授業で用いたワークシート

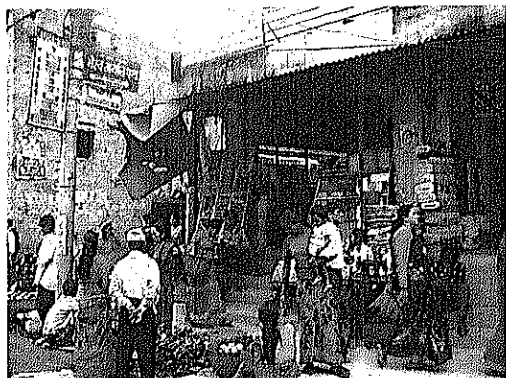


写真1 街角の様子。貧しい人々の家（上右）や、家の前でヨモギを使ってシャンプーしてもらおう子どもがいた（左）

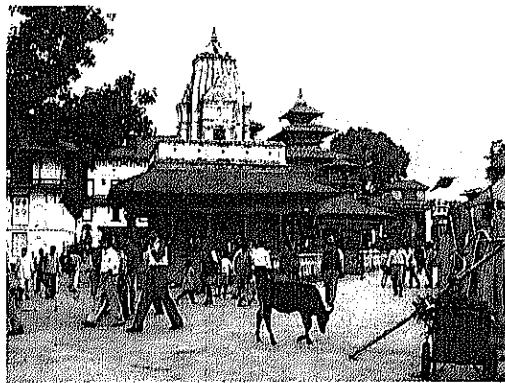


写真2 町の中のゴミと、それをあさる牛

